企業名：コーエーテクモホールディングス

レポート名：「統合報告書 2022」

1. この会社が目指している将来の姿が理解できるか

経営基本方針を着実に遂行することで、長期ビジョンで示されている「今までにない面白さで世界中のゲームファンの期待に応える」という目標を達成できるとしている。ビジョン達成への道筋がとても明確であり、統合報告書を読んだ人々がコーエーテクモホールディングスの目指している将来の姿をイメージし易いものとなっている。このことから、この統合報告書において、私はこの会社の目指している将来の姿を理解することができた。

2. この会社の現在の競争優位性が理解できるか

この統合報告書を読み解くことで、コーエーテクモホールディングスには他社と比較した際の明確な強みが多数存在することがわかった。

1 つ目に同社の収益構造は重層的であるということだ。

① 新規グローバル IP を創出する

② ヒットした IP をシリーズ展開する

③ 開発力を活かしてコラボレーションにつなげる

④ 長年培った IP をライセンスアウトする

これら 4 つの事業を循環的に行うことで、それぞれの事業が互いをが補完し合い、1 つの事業に頼ることなく、安定的な収益を作りながらイノベーションを進めていくことができる。

2 つ目の強みとして、同社の優れた開発力・技術力・マネジメント力が挙げられる。

40 年に渡ってゲームを作り続けてきたことで蓄積されたノウハウは業界においても優れたものであり、コーエーテクモホールディングスの確かな強みである。

3 つ目の強みとして、ヒューマンパワーが挙げられる。

コーエーテクモホールディングスの創業者　襟川陽一氏の考えから、同社は人材育成に力を入れており、それが競争力の確保に繋がっている。

これらのことから、私はコーエーテクモホールディングスが業界において競争優位性を有しているということが理解できた。

3. その競争優位性に持続性があるかどうか理解できるか

統合報告書のなかで、コーエーテクモホールディングスは 12 年年連続の増収を記録したと記されていた。これは前述した競争優位性に持続性があることの現れである。そのため、私はコーエーテクモホールディングスの競争優位性は持続性が伴ったものであるという理解ができた。

4. この会社で自身の人的資本の価値向上を達成できると思うか

同社は人材育成のための多くのプログラムを設置しており、これらはその一例である。

〇研修の実施（新入社員研修、フォローアップ研修、ブラザー制度、中途入社者研修、階層別研修、管理職研修、プロデューサー研修、テーブルマナー研修）

〇さまざまな学びの場を用意（外部講師講演会、専門知識・最新技術等の社内講習会・勉強会、社外セミナー派遣、英会話講座、通信教育）

〇コンプライアンス研修（ハラスメント研修、知的財産（商標・特許）研修、契約法務研修）

〇最先端会議への出席（CEDEC、海外視察研修（SIGGRAPH、GDC 等）

これらのことから、私はコーエーテクモホールディングスによる手厚い人材育成によって、自身の人的資本の価値向上を達成できることがわかった。

5. 報告書のよかった点はどこか、どのような改善余地があるか

コーエーテクモホールディングスの統合報告書の良かった点として、以下のことが挙げられる。

〇同社の伝えたい情報が視覚的に理解しやすい。

〇同社のゲームタイトルのイラストなどを交えてコミカルに説明がなされている。

〇グラフや図表によって非常に理解しやすいものになっている。

〇指針を示した後、実績を報告することで同社の、取り組みへの実現性が理解しやすいものとなっている。

〇SDGs に関する報告を行っている。

改善余地としては、特にこれといったものはないが、なにかあげるとするのであれば、ナンバリング展開の説明の際、信長の野望シリーズを取り上げていたが、その際に同社の信長の野望シリーズ以外の多くのナンバリングシリーズの説明をしたほうが良いと感じた。信長の野望シリーズは同社の代表作であるが、その他にも面白い作品が豊富に存在するので、説明しないのは勿体ないと感じてしまった。

出典　https://www.koeitecmo.co.jp/ir/library/integrated-report/